

「複式学級にしないために、急いで義務教育学校と学校の統廃合を」という教育委員会は、その考えが『とんでもない重大な問題』であることをきちんと自覚すべきです。



単式学級でも、先生が授業時間の全部を話し続けることはありません。最初に先生が解説する、そして、それを子どもが試してみる、何度もやってみる、応用にも生かしてみるというサイクルで成り立ちます。複式では、先生が解説する時間を直接指導、子どもが自主的にチャレンジする時間を間接指導とよび、

一つの学年を直接指導しているときは別の学年は間接指導、次はこれを入れ替える、また時には二学年一緒に教えて、大事な問題の更なる理解を深める。こうした教え方が一般的です。間接指導は「先生が急に来れなくなったので自習していなさい」とイメージされる自習とは全く別物です。もちろん、複式の場合、子ども同士の教えあいも頻繁で、教えあいは学力と自己肯定感、友情をはぐくむうえでこれ以上ない、効果があります。大事なのは「切磋琢磨」に子どもを駆り立てることではなく、こうした集団づくりです。

フィンランドの高学力を支えるもの

子どもが減ったので、しかたなく複式にすると言うのではなく、これまでの実践を力に地域の特色を生かした学校をつくることです。

世界で最も学力が高いと言われるフィンランド。小学校の大半は児童数百人未満、人口密度が低いので複式学級は当たり前です。しかし、少人数・複式の特性を最大限生かした効果が世界一の学力です。また、本来は単式学級でも、意図的に複数の教え方も取り入れています。異なる学年の考えを練り合わせることで、さらに大きな効果が生まれているからです。

複式にしなければいいという教育委員会の発想は余りにも短絡的です。

全ての小中学校を9年間同じ校舎で学ぶ「義務教育学校」に転換する、前段として小規模な小学校は統合・廃校に・・・こうした検討のため、地域懇談会が開かれました。教育委員会は、「このままなら近いうちに複式学級になってしまう。これを回避するため」と強調しています。しかし、こうした考えを教育行政を携わる者が持っているとするれば大問題です。とても見過ごせる話ではありません。

複式学級の豊かな実績を無視

複式学級は、「授業の半分は自習」「一つの教室で別々の勉強をしているので大変」「●年後には複式学級になる可能性がある。だから急いで統廃合を」と言います。

しかし、複式学級については、優れた実践・研究が進んでいて大きな効果を発揮しています。大人数に先生がずっとしゃべり続けることと、時間は短くても、ひとりひとりの理解度を感じながら丁寧に教えるのと、どちらがよく伝わるか、考えれば簡単にわかることです。

いま、実際に複式学級で学んでいる子どもにとって、「複式学級は問題だ」との話が、どんなに傷つく話か、考えも及ばないのでしょうか？

親の不安に寄り添い、一緒に話し合って解決していきようとする教育

これまで複式ではない学級に通っていて、「来年から複式」と言われれば、不安に思うでしょう。教育委員会がすべきことは、「安心してください。授業のやり方などは変わりますが、複式学級には素晴らしい点がいくつもあります。問題はありません。学力でも学校生活でも、しっかりとサポートして、きちんと成長できるように私たちが

ちが責任をもちます」と、励まし、不安を取り除くことです。それでも不安に思う親がいたら、その気持ちに寄り添い、話し合い、改善を続けることです。その営みひとつひとつが、本当の教育につながります。

阿寒湖義務教育学校と音別の複式学級は放置したままなのか？

本当に複式学級が問題というなら、今の時点で複式になっている阿寒湖義務教育学校や音別の複式学級を解消することが最優先のはずです。一定の人数を下回った場合、複式学級にすることができませんが、それは義務ではありません。最終的に複式にするかどうかは市町村教育委員会が決めます。市町村が独自に教員を加配して複式学級にしていけないところはたくさんあります。複式は問題と言いつつ、市の独自加配はないというのは「つじつま」があいまいです。義務教育学校にしても少子化が進めば、複式は避けがたいことになるでしょう。「阿寒や音別は複式でいいから、せめて旧釧路市内だけでも」と考えていれば、教育委員会が教育の機会均等を否定していると言われてもしかたありません。



※私は教育の専門家ではありませんし、複式学級で学んだこともありません。しかし田舎の学校だったもので、小学校は複式だったという友だちもいっぱいいました。ここに書いたことも、専門家から見れば間違っている点もあるかもしれません。でもそれを承知の上でも書かないといけないと思って書きました。